



▲東大維架橋



▲開通を喜ぶ地元の人たち

昭和三十九年十一月二十五日朝、天草博覧会見学のため大桜を出港したハシケが転覆、五人の女子中学生の命が失われました。この悲惨な事故を思い起こさせる橋の開通ではありませんが、今まで離島ゆえに辛苦の思いを永年強いられてきた地元住民三千人のこの橋にかける期待には大きいものがあります。とりわけ産業面のあい路となっていた輸送手段の解決は大きなメリットを島にもたらすことでしょう。

天草郡大矢野町の大矢野本島と千束蔵々島(維和島)を結ぶ大維架橋が四月六日開通しました。同橋は県広域営農団地農道整備事業の一環としてつくられたもので本島野米から野牛島を経て維和島・大桜間を二本の橋で結んでいます。野米―野牛島間の一号橋、西大維橋は長さ二百三十八メートルで、ランガー形式。また野牛―大桜間の二号橋、東大維橋は長さ三百八十八メートルでつり橋型です。この両橋のほか維和島内の農道九キロの舗装もこの事業に入っており総事業費十三億七千万円におよんでいます。

## 大維架橋開通

## 若い芽を育て度い

亀井英夫



企業家が事業を最大発展させるのに、最大の要素として考えるのは、「一人」の問題に外ならない。優れた人材を得て、適材適所に組織し配置するならば、企業の成長は期して待つべきものがある。この「人」と云う観点から本県の経済を考えた場合、果してどうであるか。

後進性を唱えられながらも、本県経済は官民の努力によって次第に基盤が強化され、交通体系も整備されて、日立、本田等の大手企業の進出も行われ、地元企業の努力も加わって、今後の確実な成長が期待される段階に至って居る。県民の一人として、本県に喜ばしい。折角

のこの様な趨勢を今後どう生かしてゆか、地元経済人の責任もまた重いと云わねばならない。周知の通り、本県は戦後一貫して人口流出県であったし、若い学卒者が中央に魅力を感じて流出した事は、人の面から本県発展のネックになっていた事は疑いない。特に本県が産み出したトップクラスの頭脳の多くが、中央の大学に進学して、そのまま中央に留る傾向や、地元大学のトップ層が県外に流出してしまつたりで、最も期待出来る人材層の県内残留が割合少なかった実情ではなかつたろうか。

然し、以上の様な傾向にも拘らず、矢張り可成りの数の優秀な青年達が、家業を継ぐ為とか、故郷を離れたくないとか、各種の事情で県内に留まって、各職場で新鮮な力を発揮しつつある事も事実である。そして最近、これ等の青年層の厚みが、着実に増しつつある様に感じられる事は、本県経済の発展にも誠に有難い事だと思ふ。若い可能性とエネルギーに満ちたこの人達の「やる気」や能力を、既存の組織や人間関係が、如何に受け入れ、育成して行く事が出来るかに、本県の将来が懸っていることは間違いない。右に述べた様な、郷土の為に何かをやつてゆきたいと云うグループは、吾々の目に触れる範囲でも、大小数多く存在しているが、例えば、青年商工会議所、経済同友会少壮部会等の活躍は周知の通り